

日本産イシサンゴ目の標準和名の提唱と使用のガイドライン

1. ガイドラインの目的

- 1.1. 本ガイドラインは、日本サンゴ礁学会が提唱するものである。
- 1.2. 本ガイドラインは、日本産イシサンゴ目における標準和名（以下、単に和名と呼ぶ）の提唱・命名および使用に関する方法を提案し、イシサンゴ目の和名の整理と使用、ならびに安定を促進することを目的とする。
- 1.3. 本ガイドラインを文字通りに適用することでかえって混乱が起きると思われる場合には、無理な適用を推奨するものではない。
- 1.4. 本ガイドラインは、イシサンゴ目全てのタクソンに対して和名を提唱することを推奨するものではない。

[注 1]. 本ガイドラインは、日本藻類学会にて提案された「藻類における和名の提唱と使用のガイドライン案」（日本藻類学会 藻類和名ワーキンググループ 2018）を参考に作成された。

[注 2]. 本ガイドラインでは、その項目に反した場合に何らかの問題が生じると推測されるものについては「べきである」または「べきではない」という表現を用いた。必ずしも問題が予見されないものについては「望ましい」という表現を用いた。

2. 和名の定義

- 2.1. 本ガイドラインでは、タクソンを表す学術的な日本語の名称を、標準和名（和名）と定義する。

[注 3]. タクソン (taxon, 複: タクサ, taxa) とは、ある分類階級に位置づけられる生物の集合のことを指す。分類群もしくは分類学的単位とも呼ばれる。

[注 4]. 和名は学名ではなくタクソンに付随するため、同じタクソンを指す限り、学名の適用にかかわらず同じ和名が用いられることが望ましい。

例 1. コモンサンゴと呼ばれる種子島以北の日本海域に分布する種は、紅海をタイプ産地とする *Montipora venosa* (Ehrenberg, 1834) に同定されていたが、後に未記載種であることが判明し、さらに真の *M. venosa* は沖縄に分布することが確認された。この場合、和名は学名ではなくタクソンに対応するので、種子島以北に分布する種の方にコモンサンゴの和名が適用され、真の *M. venosa* にはフカアナコモンサンゴの新称が提唱された (野村・鈴木 2017a, b)。

- 2.2. 本ガイドラインでは、和名は一名式命名法でつけられたものとみなす。

例 2. カメノコキクメイシ属 *Favites* Link, 1807 の種に対しては基本的に属の所属を表す「〇〇カメノコキクメイシ」の和名がつけられてきた。*Montastraea* de Blainville, 1830 に分類されていたタカクキクメイシ *Montastraea*

valenciennesi (Milne Edwards & Haime, 1849)はカメノコキクメイシ属に編入されたが (Huang et al. 2014), 和名は「タカクカメノコキクメイシ」などには改称されずタカクキクメイシの和名が維持される。

2.3. 本ガイドラインでは、以下の呼称は和名とみなさない。(a) タクソンを特定できない通俗名；(b) 学名や英名の全体を書き換えた仮名表記；(c) 生活史の一部に与えられた呼称。なお個別の著者や文脈において、本ガイドラインで和名とみなさない呼称を和名として使用することは排除されない。

例 3. 本ガイドラインで和名とみなされない呼称：石灰質や角質の骨格を持つ刺胞動物の総称としての「サンゴ」、テーブル状のイシサンゴ類を指す「テーブルサンゴ」、学名全体をそのまま使用する「*Montipora danae* Milne Edwards & Haime, 1851 をモンティポーラデーナ」など。

例 4. 篠原(1947)と江口(1965)では *Acropora leptocyathus* (Brook, 1891) を「てーぶるさんご」と表記しており、かつて和名であった時代もある。ただし、現在は使われていない。現在 *A. leptocyathus* は *Acropora digitifera* (Dana, 1846) の異名 (シノニム) である。

2.4. 本ガイドラインでは、学名が特定されていないタクソンに与えられた日本語名も和名とみなす。

例 5. スワリクサビライシという和名は、日本海域において学名が特定されていないタクソンである *Fungia* sp. (Sessile) *sensu* Nishihira & Veron (1995) に与えられた。

3. 和名の表記

3.1. 和名は固有名詞として扱い、ローマ字表記は頭文字を大文字で綴ることが望ましい。

[注 5]. 和名は固有名詞であるため、すでにある名称に新たな言葉を付け加えるべきでない。

例 6. *Dipsastraea speciosa* (Dana, 1846) の和名はキクメイシであり、これをキクメイシサンゴと表記することは改称に相当する。

3.2. 和名は片仮名表記することが望ましい。

例 7. 「石珊瑚目」ではなくイシサンゴ目、「緑石科」ではなくミドリイシ科と表記するのが望ましい。

3.3. 学名の種小名 (特に人名や地名由来の種名) をそのままカタカナに変えて新たな和名を作るのは控えた方が望ましい。

[注 6]. 学名の種小名をそのままカタカナに変えて和名を与えると、和名提唱時の種同定が誤っていた場合や分類学的検討の結果当該タクソンの学名が変更になった場合には和名と学名との間に齟齬が生じてしまう。これは、和名は学名ではなくタクソンに付随するからである。

例 8. 白井 (1977) は *Montipora danae* と同定したものにデーナイボコモンサンゴの和名を提唱したが、後にこれは誤同定であったことが判明し、本和名は *Montipora cebuensis* Nemenzo, 1976 の学名を持つ種に用いられることになった (野村・鈴木 2015)。

3.4. 本ガイドラインでは、体裁上の問題で和名をカタカナ表記以外の仮名遣いや仮名表記 (例えば平仮名表記) もしくはローマ字表記にすることに関しては制限しない。また、同一のタク

ソンを指す限り、仮名遣いや仮名表記およびローマ字表記の違いは別々の和名とはみなさない。

3.5. 属以上のタクソンに与えられた和名は、直後に階級名を示すべきである。

[注 7]. order Scleractinia の和名はイシサンゴ目を使うべきである。しかしながら、一般的によく用いられている、階級を明らかにしていない「類」を用いた「イシサンゴ類」についての使用を否定しない。

例 9. コモンサンゴ属 *Montipora* de Blainville, 1830 全体を指す場合には、コモンサンゴではなくコモンサンゴ属と表記される。

3.6. 和名のないタクソンに対しては、学名のまま用い、直後に階級名を示すか、もしくは何も表記しないのが望ましい。

例 10. カリブ海産サンゴである family Meandrinidae Gray, 1847 には Meandrinidae 科もしくは Meandrinidae, また genus *Diploria* Milne Edwards & Haime, 1848 には, *Diploria* 属もしくは *Diploria* と表記するのが望ましい。*Diploria labyrinthiformis* (Linnaeus, 1758) は, そのまま *Diploria labyrinthiformis* もしくは *D. labyrinthiformis* とされる。

・3.7. 和名に対応する漢字の読み方や慣例による語呂の統一、現代仮名遣いへの修正等によって、元和名の綴りの一部が後に修正される場合があるが、修正者によって和名提唱者が置き換わることはない。

例 11. カメノコキクメイシの「カメノコ」は「亀の甲」のことで、本来はカメノコウと読まれるべきであるが、カメノコとも読める。カメノコキクメイシは篠原 (1927) により提唱され、その後この類の語幹として受け継がれてきた。そのため、白井 (1977) がウネカメノコウキクメイシを提唱した後に、この慣例に則り内田・福田 (1989) がウネカメノコキクメイシに綴りを修正した。この場合、本和名提唱者は修正者である内田・福田 (1989) に置き換わることはない。

例 12. 篠原 (1927) により提唱された「きくくわさんご」の歴史的仮名遣いによる和名が、後に白井 (1966) によって現代仮名遣いである「キッカサンゴ」に、さらに慣例に倣い白井 (1977) によって「キッカサンゴ」にそれぞれ修正されても、修正者によって和名提唱者が置き換わることはない。

4. 和名の命名

4.1. 和名を命名する際には、科学・教育・産業・法律・行政など公共の場で使用されることを十分に考慮し、これらの場で使用が自粛されるような和名を命名するべきではない。特に差別的な表現を含んだ名称とならないように十分に配慮するべきである。また、非常に長い和名や発音しづらい和名、既存の和名とよく似た紛らわしい和名など、不便や混乱を招く和名は避けるべきである。

[注 8]. 日本魚類学会では、メクラ・オシ・バカ・テナシ・アシナシ・セムシ・イザリ・セツパリ・ミツクチの語を差別的語とみなし改称した (日本魚類学会 2007)。また、罹患者に精神的な苦痛を与えるような病状を表す表現、例えばサメハダ、ケロイド、アバタ、ヘルニア、アザ、シラコ、コビト等も避けるべきである。さらに、基準となる種と異なるという意味で和名に「ニセ～、～ダマシ、～モドキ」の接頭語や接尾語があるが、学名の「para～, pseudo～, ~opsis」に単純に対応したものであるにせよ、生物に敬意を表すな

らばこれらの用語の使用は控えるべきである。なお、本ガイドラインは差別的意味合いを持つ和名であっても、既に提唱されているものについては、変更を強要するものではない。

4.2. 異名（シノニム）の提唱は行うべきではない。また、分類学的位置の変更に伴う和名の改称は、改称しないことによって混乱が生じる場合など必要最低限にとどめるべきである。響きが悪い・気に入らないといった理由による改称は避けるべきである。

4.3. 同名（ホモニム）は提唱すべきでない。

[注 9]. 異名（シノニム）とは、同じタクソンに与えられた複数の和名の各々のことであり、同名（ホモニム）とは、異なるタクサに与えられた同一の和名のことである。

4.4. イシサンゴ目同士もしくはイシサンゴ目以外の生物とイシサンゴ目の間で異物同名が認められた場合、知名度の低い和名、または後から提唱された和名を改称するか、所属分類群との整合性を勘案して改称を提案するべきである。

例 12. イシサンゴ類の *Polyphyllia talpina* (Lamarck, 1801) と棘皮動物（ナマコ類）の *Holothuria (Microthele) nobilis* (Selenka, 1867) には同じイシナマコの和名が与えられている。本和名はナマコ類であるという誤解を生じかねないので、イシサンゴ類の方を改称すべきである。

4.5. 属タクソンの和名に対してはタイプ種と同一の和名、科タクソンの和名に対してはタイプ属と同一の和名を与えることが望ましい。

[注 10]. タイプ種：属の代表として指定される種のこと。タイプ属：科の代表として指定される属のこと。

[注 11]. タイプ種ではない種に基づいて属の和名をつけた場合、その種が別属に移されたときに学名と和名の間に齟齬や混乱が生じることがある。

例 13. *Fungia* Lamarck, 1801 は、かつてクサビライシ属と呼ばれており、クサビライシという和名は、国際動物命名規約上のタイプ種ではない *Fungia scutaria* Lamarck, 1801 に与えられていた。その後、Gittenberger et al. (2011) によって、この種は *Lobactis* Verrill, 1864 に移され *Lobactis scutaria* (Lamarck, 1801) となり、その他の種も別属へと移された。結果として、*Fungia* はシタザラクサビライシ *Fungia fungites* (Linnaeus, 1758) のみとなった。そこで、杉原ら (2015) は、*Lobactis* の和名をタイプ種であるクサビライシ *L. scutaria* の和名に基づきクサビライシ属とし、*Fungia* の和名をシタザラクサビライシ属へと改称した。

4.6. 和名の語尾を属の和名と一致させて命名することができるが（二名法的命名）、分類学的変更に伴う属や種の移動によって自動的に和名の語尾が変更されることはない。

[注 12]. これは、第 2.2 項にあるように、和名は一名式命名法でつけられたものとみなされるためである。

5. 和名の公表

5.1. 新和名の提唱は、恒久的な利用を想定した学術的出版物（電子出版を含む）において行われるべきである。

5.2. 新和名の提唱に際しては、「新称」または「新和名（新標準和名）」などの言葉を用いて新和名であることを明示すべきであり、将来的に混乱の原因となる「仮称」は用いるべきではない。

い。また語源の説明を伴うことが望ましい。また、何らかの理由で和名を変更すべき場合は、その合理的な理由を添えて、「改称」する（した）ことを示すべきである。

5.3. 属以上のタクソンに対して和名を提唱する場合、階級を明記すべきである。

5.4. 学名に対して新和名を提唱する場合、対応する学名は学名の著者名および発表年と共に引用すべきである。ただし科より上位の学名で、学名の著者が明らかでない場合にはその限りではない。

5.5. 新和名を提唱する場合、タクソンを特定するために必要かつ十分な情報（記載文など）を与えるか、引用すべきである。特に、和名の基準となる骨格標本を伴うべきであり、画像やDNA情報なども伴うことが望ましい。

5.6. 日本に分布することが知られていないタクソンに対して和名を提唱する場合には、和名提唱競争を防止するため、提唱する必要性を示すことが望ましい。

6. 和名の使用

6.1. タイプ種やタイプ属を維持したまま学名が変更された場合（属・種などの組換えや後続同名に対する新名の提唱など）でも、和名は変更せずに使用する。

[注 13]. そのことによって混乱が生じる場合には、改称を提案することもできる。

6.2. 同じ種もしくは分類階級に対して複数の和名が提唱されている場合（異名）や、異なる種もしくは分類階級に対して同じ和名が提唱されている場合（同名）は、混乱が生じない限りにおいて、長年継続的に使われている用例がある場合はそれを尊重し、そうでない場合は先取権を尊重すべきである。

引用文献

江口元起 (1965) イシサンゴ目. 岡田要・内田亨・内田清之助 (編) 新日本動物図鑑上巻, 北隆館, 東京, pp. 270-296.

Gittenberger A, Reijnen BT, Hoeksema BW (2011) A molecularly based phylogeny reconstruction of mushroom corals (Scleractinia: Fungiidae) with taxonomic consequences and evolutionary implications for life history traits. *Contributions to Zoology* 80: 107-132.

https://brill.com/view/journals/ctoz/80/2/article-p107_2.xml

Huang D, Benzioni F, Fukami H, Knowlton N, Smith ND, Budd AF (2014) Taxonomic classification of the reef coral families Merulinidae, Montastracidae, and Diploastracidae (Cnidaria: Anthozoa: Scleractinia). *Zoological Journal of the Linnean Society* 171: 277-355.

日本魚類学会 (2007) 差別的語を含む標準和名の改名とお願い.

<https://www.fish-isj.jp/info/j070201.html> on 2021-10-10.

日本藻類学会 藻類和名ワーキンググループ (2018) 藻類における和名の提唱と使用に関するガイド

- ライン案について. 藻類 66: 130-133.
- http://sourui.org/publications/sorui/list/Sourui_PDF/Sourui-66-02-130.pdf
- 西平守孝・Veron JEN (1995) 日本の造礁サンゴ類. 海游舎, 東京, 439 pp.
- 野村恵一・鈴木 豪 (2015) コモンサンゴ類の同定の話 (26), 国内産種の紹介 14. イボコモンサンゴ種群 (1). マリンパビリオン 44: 30-31.
- <http://www.kushimoto.co.jp/marinepavilion/data/44-4.pdf>
- 野村恵一・鈴木 豪 (2017a) コモンサンゴ類の同定の話 (36), 国内産種の紹介 24. ウネコモンサンゴ種群 (8). コモンサンゴ種群 (1). マリンパビリオン 46: 4-6.
- <http://www.kushimoto.co.jp/marinepavilion/data/46-1.pdf>
- 野村恵一・鈴木 豪 (2017b) コモンサンゴ類の同定の話 (36), 国内産種の紹介 24. ウネコモンサンゴ種群 (8). コモンサンゴ種群 (2). マリンパビリオン 46: 12-13.
- <http://www.kushimoto.co.jp/marinepavilion/data/46-2.pdf>
- 篠原 雄 (1927) 石珊瑚目. 日本動物図鑑: 1884-1894. 北隆館, 東京.
- 篠原 雄・杉山敏郎 (1947) てーぶるさんご. 内田清之助 (著者代表) 改訂増補日本動物図鑑. 北隆館, 東京, p. 1583.
- 白井祥平 (1977) 原色沖縄海中動物生態図鑑. 新星図書, 那覇, 636 pp.
- 杉原 薫・野村恵一・横地洋之・下池和幸・梶原健次・鈴木 豪・座安佑奈・出羽尚子・深見裕伸・北野裕子・松本 尚・目崎拓真・永田俊輔・立川浩之・木村 匡 (2015) 日本の有藻性イシサンゴ類～種子島編～ 国立環境研究所 生物・生態系環境研究センター, つくば市, 198 pp.
- <http://www.nies.go.jp/biology/data/coral.html>
- 内海富士夫 (1966) 紀伊半島沿岸の浅海珊瑚類相の概況. pp.97-102. 日本自然保護協会調査報告第 27 号, 和歌山県海中公園学術調査報告書. (財)日本自然保護協会.
- 内田紘臣・福田照雄 (1989) サンゴ. 沖縄海中生物図鑑, 第 10 巻. サザンプレス, 那覇, 246 pp.